アカデミア メランコリア（第15回）（若手のコラム）

東京大学農学生命科学研究科　日本学術振興会特別研究員 DC　山口 珠葉

はじめまして、東京大学農学生命科学研究科の山口珠葉と申します。東京大学大気海洋研究所の高木さんよりご指名いただき、第15回の若手のコラムを担当することとなりました。私は亜熱帯貧栄養海域におけるリンの動態、とりわけリン酸の乏しい環境で生物にとって重要な役割を担うとされる易分解性溶存有機態リンという画分に着目し、その濃度分布や生物可用性などについて研究を行っています。

大変ありがたいことに、これまで幾度か研究航海に参加する機会に恵まれ、最も長かったものでは約50日間・15測点の観測に携わりました。こうした研究航海が知的好奇心を刺激する貴重な経験であることは言うまでもありませんが、同時に（主に体力的な意味で）中々ハードな環境であることも否めません。しかしながら、過去にはほぼ5年間・延べ1,000以上の観測点というとてつもない規模で行われた研究航海があったことをご存知でしょうか？しかも19世紀に、全長27 mほどの帆船で。これはダーウィンの乗ったビーグル号航海（1831-1836）のことで、浅学な私は先日開催されていた大英自然史博物館展にて初めてこの詳細を知りました。この展覧会ではその一角に「世界への探検が遺したもの」と題して、ビーグル号をはじめ、チャレンジャー号やエンデバー号航海にまつわる資料や標本などが数多く展示されていました。それら過去の偉業の数々、そしてその裏にあったであろう労苦を思うと驚嘆の念を禁じえません。一緒に鑑賞していた研究室のメンバーもなまじ乗船経験がある者が多かったためか、皆で測点数が多すぎてぞっとするだとか、試料のラベリングが途方もないだとか、標本の処理・保管はどうしていたのかなど、おそらく一般の方々とは一風変わった視点から展示内容について大いに盛り上がっていました。

およそ200年も前のことに対して、こうした半ば親近感にも似た所感を抱くのは些か不思議な気もしますが、航海という研究手段がある限り、それは今後もあまり変わらないのかもしれません。100年、200年後の海洋学や観測技術はどのように進歩しているのか、そしてその時21世紀の我々の活動はどのように捉えられるのだろうか、などと一層取り留めもない思考に至ったところでそろそろ終わりたいと思います。僭越ながらも、自身の研究成果がほんのわずかでもこうした海洋学の発展に貢献できるよう、今後も精進を重ねていくとともに、ここまで拙文にお付き合いいただきましたこと感謝申し上げます。

編集後記

ニュースレターは編集委員会が新体制になって2号目の発行を迎え、今号から新しく富山大の張さんが新しく編集委員として加わってくださいました。よろしくお願いいたします。今号は安藤編集委員長に続いて私が編集後記を書かせていただくこととなりました。とはいえ、何を書いたものでしょうか。津田前委員長は編集後記を書くことを楽しみにされていたそうです。理由のひとつは自由に書けるから、とのことでした。私も自由に何か書いてやろうと思ってはみたものの、いざ、となると、要求されたテーマがないと戸惑うばかりです。

よく言われるように、私たちは時に自由を持て余すことがあります。それはおそらく、自分の中に何らかの指針や問題意識がないということに通じるのでしょう。

昔話で恐縮ですが、私の学生時代は、今から見るとずいぶん牧歌的な雰囲気の中で比較的自由に勉強や研究をさせてもらっていました。私に関して言うと。この自由さのおかげでサボったり迷ったり悩んだりを繰り返し、研究は遅々として進まずにいました。締め切りに追われて何らかの原稿を先生に持っていくと、しばらくしてから「これ、自分で読んでみた？」と聞かれ、当然ながら「はい」と答えます。すると笑顔で「ふーん、じゃあ書き直して」と何も添削されていない原稿をそのまま返されたこともありました。それでまともなものができるわけでもありませんので、結局は先生の手間も余計にかかるでしょうし、第一仕上がるかどうかさえ怪しいところです。学生の不手際のために陰で誰かに頭を下げることもあったでしょうし、昔の先生が学生を信じて責任を取る覚悟には相当なものがあったのだと思います。でも、私にとっても、この自由さのおかげで、ものごとは自分で考えなければいけないのだという覚悟みたいなものは身についたかなと思います。自由さの中で迷うこともあながち悪いものではないかな。

自分の学生時代がどうであったかを考えると、とてもじゃありませんがエラそうに学生に意見をすることなんかできないのじゃないかと思ってしまいますが、自分のことは棚に上げて原稿を突き返しています。やはり自分が教えてもらったようにしか教えられないのだなあ、そういうものからもなかなか自由になることは難しいのだなあ、と変な感慨をもっています。

ニュースレターには海洋学会員の皆さんのリアルタイムの活動の情報が掲載されています。記事からはそれぞれの方が海洋学にかか